川辺川（縄ノ観音周辺）

豪雨被害を機に再構築、令和6年に開校した球磨清流学園

人吉城跡から望む球磨川

球磨川流域に未曾有の被害をもたらした豪雨災害から4年が経過しました。
改めて、犠牲となられた方々に哀悼の意を表するとともに、
御遺族の皆様にお悔やみを申し上げます。
令和2年7月豪雨からの復旧・復興と「緑の流域治水」の推進は
今後の県政において、最優先に取り組んでいく事項です。
被災者の最後の一人まで、住まいやなりわいの再建を支援するとともに、
鉄道などインフラの復旧、復興まちづくり、産業・雇用の創出など、
球磨川流域の再生・発展に向けた取り組みをしっかり支えて参ります。
球磨川流域の未来をともに創っていきましょう。

令和6年7月4日

熊本県知事　木村　敬

熊本県

令和2年7月豪雨から4年　ともに、未来へ

矢野解光さん（芦北町）新しいコミュニティーで再出発

妻まさ子さんと米作りをした田んぼで思い出を語る矢野解光さん

芦北町伏木氏の矢野解光さん（77）は2020年7月4日の豪雨で自宅が土砂に押し流されました。矢野さんは奇跡的に一命を取り留めましたが、妻まさ子さん＝当時（67）＝は帰らぬ人に。「避難するぞ」と声をかけた矢先の出来事でした。矢野さんは「日の光が差していても暗闇の中にいるような感じで気がめいっていた」と当時を振り返ります。

最愛の妻と自宅を失った矢野さんに転機が訪れたのは翌21年1月。「オンライン行幸啓」で、まさ子さんの遺影と共に天皇皇后両陛下と対面できることになりました。「温かい励ましのお言葉を頂き、なんとしても生きていかねばという気力が湧いてきました。一点の光が見えた気がします」と矢野さん。被災前から請け負う植木の剪定や木の伐採に一層努めました。

「妻の思いを胸に米作り」

「令和2年7月豪雨」で土砂に押しつぶされ全壊した矢野さんの自宅（本人提供）

親族や役場と相談の末、伏木氏の山が見える災害公営住宅に入居を決意し、23年9月に新生活をスタート。住まいが再建したことで、気持ちも前向きになりました。今では新しい地域での交流が生まれ、一緒にグラウンドゴルフをしています。長年住んでいた伏木氏地区の人たちとの交流も続いています。

「子や孫においしいお米を食べさせたい」。まさ子さんの思いを胸に、今年も5月には田植えを終えました。一緒に米作りに励んだ思い出の田んぼまで、車で片道20分、毎日のように足を運びます。「多くの方から心温まるご支援を頂いた。何事にも感謝を込めて取り組んでいくことが妻の供養にもなる。楽しく続けていきたい」と充実した表情で話していました。

球磨村森林組合「球泉洞」魅力をさらに高め復活

球磨村の森林整備を担う球磨村森林組合は、観光名所「球泉洞」の管理・運営も手がけています。「令和2年7月豪雨」で、裏山からの土石流により、建物や鍾乳洞に続くトンネルなどに大量の土砂が流れ込みました。参事の大童大輔さん（50）は「復旧は正直、難しいと思った」と振り返ります。

そんな大童さんを奮起させたのは、組合員や地域住民、国、県、ボランティアからの支援でした。復旧を待つ人たちの期待に応えたい気持ちが沸々と湧いてきたそうです。「地元に愛され、先輩たちが守ってきた観光産業を消すわけにいかないと考えました」

10トントラック二千台分の土砂を撤去し、施設を復旧。被災から1年9カ月後の2022年4月に営業を再開しました。

復旧工事が終わりリニューアルオープンした球泉洞。被災前のにぎわいが戻った（球磨村森林組合提供）

「地域の交流人口増めざす」

復旧に向けて大切にしたのは、より魅力的な施設づくりや、地域とのつながりでした。村の産品のアンテナショップ、大手メーカーと提携してアウトドアショップをオープンさせ、ウッドデッキを新設。食事処は「幸盛亭」と屋号を変え、メニューも一新しました。スタッフみんなで明るく、元気に観光客を迎えています。

大童さんは「球泉洞は来年、開業50周年。キャンプ場や、今後整備を進める森林館など周辺の魅力も高めながら、今後も球磨の各地域と連携し交流人口を増やしていきたい」と抱負を述べます。

大和一酒造元（人吉市）自然の恵み 焼酎造りを通じ伝える

球磨焼酎の蔵元「大和一酒造元」（人吉市下林町）も、4年前の豪雨で甚大な被害を受けました。発災時の7月4日午前5時、代表の下田文仁さん（57）は焼酎瓶が並ぶ作業場にいたそうです。地下タンクの原酒を無駄にせず救出する作業に追われていました。

ようやく原酒を移し替えた時、製造場の木戸から轟音と共に濁流が押し寄せ、蔵の浸水は約3㍍の高さに到達。焼酎の8割ほどが流されてしまいました。惨状を目の当たりにし、「再建は難しい」という思いが脳裏をよぎったといいます。しかし、連日駆け付けてくれた友人や同業者との片付けが進むと、下田さんに再び、焼酎造りへの情熱があふれてきました。

全ての酵母が濁流に流されたものの、豪雨で減ばれてきた球磨川の新たな酵母を生かした焼酎造りをスタート。2022年7月、「球磨川」の銘柄で発売を始めた焼酎は「優しい味に仕上がった」（下田さん）と胸を張ります。

再建を進める中で、下田さんが重視したのが水害の教訓。「被災して、自然の恐ろしさと同時に、あらためて自然の恵みのありがたさを知り、球磨川と共に生きていく覚悟ができた」と言います。

焼酎造りは酵母や水、米など、自然があってこその産業。下田さんは「この風土の中で、5000年の歴史を背負って焼酎造りができている。業界全体を盛り上げるためにも、球磨焼酎造りの源を知ってもらう活動に力を注いでいきたい」と先を見据えます。

災害の教訓から、甕（かめ）が横倒しにならないよう木枠を付けてロープでつるす仕組みを取り入れた

「球磨川とともに生きる」

被災直後の酵母や原酒を貯蔵しているタンクは水害で全てひっくり返った（大和一酒造元提供）

食処さかもと鮎やな（八代市）多くの支援に感謝 地元に恩返しを

八代市坂本町の住民有志で営むアユ料理店「食処さかもと鮎やな」は「令和2年7月豪雨」で甚大な被害を受け、休業を余儀なくされました。代表理事の松嶋一実さん（76）ら役員は被災1週間後にようやく店内に足を踏み入れ、その光景に言葉を失ったそうです。天井まで泥水で浸水し、食洗機や大型冷蔵庫はひっくり返り、冷凍庫や椅子、テーブルなどほとんどが流出していました。

一時は閉店も検討しましたが、翌2021年、八代市が「さかもと復興商店街」への出店を繰り返し提案。流失した看板が上天草市から奇跡的に“生還”したことも後押しとなり、松嶋さんらは「マイナスからの出発」を決意しました。再建資金はなりわい補助金やクラウドファンディングで確保。多くの支援を受け、同年7月、仮店舗で土・日曜、祝日のみの営業を再開しました。来客は新型コロナ禍もあり厳しい状況でしたが、徐々に増え、23年には目標を上回る4577人が来店。県外からのリピーターも多く、経営は順調に推移しています。

今年6月には利益の一部を地元8校区の地域振興会に寄付。「利益の地域還元は当初からの目標。一つ肩の荷が下り、感無量です」（松嶋さん）。

今後の目標は若い世代を雇用するために、通年営業で利益を確保することで、アユ以外の名物となるものについても模索中です。松嶋さんは「この町に住みたいと思う人が多く現れるよう、交流人口の増加にも貢献したい」と抱負を語ります。

今季の鮎やなの営業は、11月4日までの土・日曜、祝日と、8月13～15日。

6月7日に開かれた試食会でアユを焼く食処さかもと鮎やなのスタッフ

「坂本の魅力、発信したい」

被災直後の店内。調理器具や食器類は流出したり泥にまみれたりして使えなくなった（食処さかもと鮎やな提供）

相良村役場　住民の声を聴き、未来につなげる村づくり

球磨郡のほぼ真ん中にある相良村では、「令和2年7月豪雨」で、村の中央を縦断する川辺川と、南部を流れる球磨川が氾濫。建物404棟、村道56カ所が損傷し、110㌶の農地が浸水するなどの被害が出ました。当時、総務課財政係にいた佐竹淑子さん（49）は「部署の垣根を越え、職員一丸で被災者の支援や復旧活動にあたった」といいます。

村は同年9月、復興業務を取りまとめる企画復興係を新設（現在は企画情報係）。佐竹さんを含む4人が配属され、復興計画の作成も担当しました。その際取り組んだのが、村民との懇談会や被災者の意向調査。中学生らのアンケートでは、「住民の方々のための復興なので、どのような復興・未来像が望ましいか、住民の声を聴くことが大切と考えました」と佐竹さん。村は復興にスピード感を持って取り組み、災害公営住宅や高台の宅地分譲地を被災地で初めて整備しました。

一方で住民から多く寄せられたのが、川辺川を中心とする復興を望む声でした。村は「川辺川魅力創造事業」を立ち上げ、村民が気軽に利用でき、交流人口拡大につながる拠点にもなる施設の整備を進めています。担当の乙益隆道さん（34）によると、実証実験として昨年開催したキャンプや川遊びイベントに村内外から約300人が参加したそうです。「川辺川を軸に流域の振興を進め、将来的には人吉、球磨地域で連携して魅力を発信したい」と抱負を述べます。

「川辺川魅力創造事業」の実証実験で、昨年と一昨年に実施された川遊び体験イベント（相良村提供）

「川辺川を軸に流域の振興へ」

川辺川流域では河川の氾濫で多くの農地が浸水した。写真は上川辺地区の被災直後の様子（相良村提供）